

タイトル

北田灰色

以下は『夢十夜』夏目漱石より借用しています。

第一夜

こんな夢を見た。腕組をして枕元に坐すわっていると、仰向あおむきに寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭りんかくの柔やわらかな瓜実うりぎね顔がおをその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇くちびるの色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然はつきり云った。自分も確たしかにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗のぞき込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱつちりと眼を開あけた。大きな潤うるおいのある眼で、長い睫まつげに包まれた中は、ただ一面に真黒であつた。その真黒な眸ひとみの奥に、自分の姿が鮮あざやかに浮かんでいる。自分は透すき徹とおるほど深く見えるこの黒眼の色沢つやを眺めて、これでも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕の傍そばへ口を付けて、死ぬんじやなかるうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに※（「目十争」、第3水準「*めとせう*」）みはつたまま、やつぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云つた。じゃ、私わたしの顔が見えるかいと一心いっしんに聞くと、見えるかいて、そら、そこに、写つてるじゃありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかと思つた。しばらくして、女がまたこう云つた。「死んだら、埋うめて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片かけを墓標はかじるしに置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢あいに来ますから」自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、――あなた、待っていられますか」自分は黙つて首肯うなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、「百年待っていて下さい」と思ひ切つた声で云つた。「百年、私の墓の傍そばに坐つて待っていて下さい。きつと逢いに来ますから」自分はただ待っていると答えた。すると、黒い眸ひとみのなかに鮮あざやかに見えた自分の姿が、ぼうつと崩くずれて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫まつげの間から涙が頬へ垂れた。――もう死んでいた。自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘つた。真珠貝は大きな滑なめらかな縁ふちの鋭するどい貝であつた。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿しめつた土の匂においもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。それから星の破片かけの落ちたのを拾つて来て、かるく土の上へ乗せた。星の破片は丸かつた。長い間大空を落ちている間まに、角かどが取れて滑なめらかになつたんだろうと思つた。抱だき上あげて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。自分は苔こけの上に坐つた。これから百年の間こうして待っているんだと考えながら、腕組をして、丸い墓石はかいしを眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな

赤い日であった。それがまた女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定かんじようした。しばらくするとまた唐紅からくれないの天道てんとうがのそりと上のぼつて来た。そうして黙つて沈んでしまった。二つとまた勘定した。自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、苔こけの生はえた丸い石を眺めて、自分は女に欺だまされたのではなからうかと思ひ出した。すると石の下から斜はすに自分の方へ向いて青い茎くきが伸びて来た。見る間に長くなつてちやうど自分の胸のあたりまで来て留まつた。と思うと、すらりと揺ゆらぐ茎くきの頂いただきに、心持首を傾かたぶけていた細長い一輪の蕾つぼみが、ふつくと弁はなびらを開いた。真白な百合ゆりが鼻の先で骨に徹こたえるほど匂つた。そこへ遥はるかの上から、ぽたりと露つゆが落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴したたる、白い花弁はなびらに接吻せつぶんした。自分が百合から顔を離す拍子ひょうしに思わず、遠い空を見たら、暁あかつきの星がたった一つ瞬またたいていた。「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。